

## 三中時代の思い出

三中（三豊中学）は、現在の観音寺第一高等学校。このエッセイは、昭和四二年、同校の創立七〇周年記念の文集に執筆を求められたもの。当時の日本の中学校生活の雰囲気がいまさらと伝わってくるみずみずしい文章。

昭和三年四月、私は三豊中学に入学した。新入生にとっては、まず服装が第一の関心事であった。新しい洋服は霜降りの夏服まで待つことになっておるので、当分は和服に靴をはいて通ったものである。夏服ができ、秋には冬服の用意も整った。冬の外套は新しいのが欲しかったが、本家の従兄のお古で間に合せることにした。洋服は何れも五、六円で、たしか丸亀の秋田という店で調達したように覚えておる。

毎日、豊浜駅から汽車で通学した。最初は旧式の客車で、ボギー車を通るようになったのは高学年に進級してからであった。いつであったか、東京の大相撲が巡業に来て、汽車に乗る時、各座席の横についておるドアの入口が狭いので、体を横にして乗車している姿を見たこともあった。男子の学生は列車の前半、女子の学生はその後半に乗るのが不文の慣例であった。

観音寺駅前の一貫堂は、当時からパン屋としてその盛況を誇っておったが、われわれは買い食い禁

止の校規を破って、しょっちゅう裏の台所でふかし立ての甘いにおいをするパンを食べさせてもらったものだ。やさしかった奥さんの温容が、今でもありありと思い出される。

当時は三島中学ができたばかりであったので（三島中学の開校は大正一二年の春であった）、東予地方から多くの学生が三島中学に汽車で通っておった。私の一年生のとき五年の橋本克彦さんは、寡黙で礼儀正しく、しかも眉目も学業も秀れておった。いつも駅や車中で静かに勉強しておったが、そのノートは鉛筆でとても綺麗に書かれておった。この人は、六高から東大に進まれて国文学者になられた。

私より二年上の三宅秀郎さんは、四年から一高に入った秀才で、東大の医学部を出て、現在東京のある病院の部長をしておられる。彼は当時から強い近視眼であった。三宅さんと同期には、私と同じ村で田中隆造さんという当時からよく練れた思いやりの深い先輩がおられた。村一番の素封家の次男であったが、洋服や靴も質素で、ノートや鉛筆の一片さえ、心にくいまでに大切にされていた。野球部のマネージャーとしてすぐれた統御力を発揮され、それも手伝ってか今は故人となった木村名投手を擁した三中野球部は、高松や松山の専門チームと立派に接戦を演じていた。田中さんは六高から京大法学部に進まれ、現在では阪神電鉄の専務の要職にある。

私のクラス（二四回）は、三中にとつては、一〇〇名定員の最後であったが、いわば、豊作ともいうべき出来で、秀才が雲のように輩出した。トップクラスには共同石油社長の森齋夫君、観音寺一高校長の本田益夫君、京大教授の佐伯富君をはじめ、観音寺市で開業されておる大西逸平君、高瀬の松岡健雄君、財田の川原恒雄君、鹿島建設の田中淑造君、その他がいた。私などは、はるかその人達の後塵を拝する凡才であった。七〇数人の卒業生の中、官立の高校と高専に進学できた者が、たしか三人位はいたように思う。

当時の三中校長には、増田、生井、梅津の三先生が相次いで就任された。中井虎男先生は別格で、全く栄達を他処に、子弟の教育に没頭され、校内外の高い尊敬をあつめておられた。片山伝蔵先生、細川敏太郎先生、高井佐武郎先生等には、母校の先輩のせい、特別のきびしさと親しみを感じたものである。細川先生の漢文の講義は、私にとっては、楽しみの一つであり、田舎の中学生にとっては勿体ないような魅力ある名講義であつた。

春まだ浅い卒業や入学の時の人々のせわしい気配、新しく手に入れた教科書のもつ新鮮な感觸、有明の浜の水泳や野外演習を彩つた友の姿や顔また顔、くずしや、ちくわに濃いぬかの香をもつ新香を添えた弁当の魅力、校庭の隅で時折展開された上級生のリンチをめぐる緊張、丸亀中学や西条中学との対校試合にかける興奮等々、母校を舞台とする思い出はつきない。その母校も今年はいよいよ七〇周年を迎えようとしておるし、私も到々還暦を迎えるに至つたのである。

## 高等試験断想

昭和十一年四月、大蔵省に入省した先輩として、高松高商の後輩へ向けて高等文官試験受験の心構えを大平哲学を織り込んで興味深く説いている。

丸重先生より近頃同窓の方々に高文をねらうてゐる人が相當多いやうだから参考のために君の経験を綴ってくれとの御依頼をうけましたが、各人夫々性格や環境の相違があるので私の採つた具體的な或は技術的なやり方を紹介したところで果して効果的かどうか疑はれますから、ここでは高文受験に對するもつと普遍的な心構へとも申すべきものを書いてみたいと思ひます。

(一) 先づ第一受験を志す以上は職業として官吏を選ぶ考へだらうと思ひますが、自分は官吏になるんだと言ふ意識を何時も持つて勉強することが大切であると考へます。元來職業の如何は私共にとつては第二義的な問題で一概にこれがいいとかあれでなければならぬと言ふわけでもありませんが、今日の如く一旦職についた以上その後の転職がおそろしくむづかしい時代には、職業の選択は自己の性向其他の事情を慎重に考慮して相當の熱意と準備を以て當らなければならぬものと思はれます。かふ云ふつきつめた熱意と欲求がなければ、實のある勉強や準備は出來ないと思ひます。

(一) 次に私はどちらかと言へば商業經濟の専攻者でありますからかう言ふ特殊の立場を吟味してそれを生かすやうに心掛ける必要があると思ひます。今日のように知識の普及した時代に於ては、(殊に社會科學の領域に於ては) 専攻科目の如何によつてどの程度まで技術的な特長を主張し得るかは尚疑問の餘地はありますが、私共の思惟は少くとも多年商業學或は經濟學と言ふやうな實證科學の分野に於て訓練されてゐるので、法學士の間にはもの考へ方に相當の懸隔があることは否めませぬ。だから選択科目の範圍に於ては特に法律に自信のある人は別として、經濟科目を選び自分の特長をのばすのが得策であると考へます。

又かかる心構へは官界に就職するに際しても、更に進んでは愈々官吏となつてからも必要であると思ひます。今迄の官吏は行政官にしても司法官にしても殆んど全部が法學士であつたことは事實であります。最近のやうに經濟行政、經濟外交或は經濟問題の訴訟と言ふもの的重要性が認識されて來て、官吏の經濟學的素養の必要が叫ばれて來、行政機構の改正を促す根因もかかる政治對象の變革に由來せることも今では一片の常識となつてゐます。かやうな情勢の下に於て私共經濟専攻者が官界に入ると云ふことは決して不自然なコースではないのみならず、むしろ極めて當然のこととさへ考へられます。最近の官吏採用状況から推しても、かふ云ふ思潮の動いてゐることがよみとれるわけで、高文に合格した經濟學士、商學士は或意味に於て有利な立場にあると言つても差支へないと考へます。私共の一ツ橋からも永い傳統をもつ外務省は別としても、鐵道、商工の両省をはじめとして内務、大蔵、司法、農林、拓務等にもどんどん進出してその持つ特殊技能の故に特異な職分を果してゐます。行政事務の能率化、換言すれば行政の商化或は經營經濟化の必要が常に民間側から叫ばれてゐるがこの方面の開拓によつて時代の要求に順應した施政樹立の踏台となる役目は、大問題だけに事の成否も

暫くおくも、先づ第一に私共經濟專攻者の担はねばならないところであると考へられます。

かかる必要は進歩的な法律學者をして民法の商化より進んで行政法の商化にまで行かなければならぬと云ふ主張を抱かしめその法律的構成に努力せしめつつある状態にまで立至つてゐます。經濟專攻の高等教育をつけたものの實業界に於ける先驅者的使命が半ば終了したかの感がある現在、官界に於て彼等の開拓を待つ処女地が尚残されてゐると云ふことは面白い事實であります。歴史は徐々にではあるがこの方面に於ても大きい旋回を開始してゐます。

(三) 少々問題の本筋から離れましたが次に勉強の方針について一言します。私は一科目について一つの基本参考書を中心にその内容の消化と諸原則、諸現象の有機的聯關的理解に心掛けました。他の二、三の参考書も讀みましたが、基本参考書の理解に必要な限度に止め自分の體系は基本参考書に基いて築き上げました。又散歩をしたり電車に揺られてゐる間にも大抵一つの問題を頭に描いてゐてその内容を吟味したり或はそれに聯關した法律關係なり經濟原則なりを考へる習慣をつけました。例へば道路を歩く時は道路の主體、民有地との境界査定權、公用の設定及び廢止、その所有權の性質及び制限、その使用に關する法律關係等を頭にうかへつつ眼前を右往左往する圖タクやバス或は電柱、その他のものの使用權の根據などを考へ併せ、學校や公園に行つても同様にそれを廻る法律關係を手繰つて行きます。すると面白いもので森羅萬象と言へば大げさですが、日常經驗する事件や目撃する現象が曲りなりにも法律的に解釋出来るやうになつて來ます。すると段々興味も湧いて來ます。經濟問題にしても新聞や雑誌に表はれる記事を、經濟學の原則と關聯して得心がゆくまで考へるやうにして、不充分ではあるが言はば生きた學問をやるやうに心懸けました。

志を同じうする友人と議論することも効果的で、自分の考へを表現する訓練ともなり、自分が氣が

つかないで看過する側面を捉へ得ると云ふことにもなります。つまり根のある幅のある内容的な理解が必要だと考へます。殊にその有難味は口述試験の場合に痛感します。口述試験の目的はさう云ふ體系上連關があり、しかも内容的な理解があるかどうかを試すものであると言つても過言でないと思ひます。かやうな理解に裏付けられた自然な無理のない論理の運びがありさへすれば答案乃至は答辯の内容が試験委員の學說と符合しなくても差支へないと思ひます。勿論試験委員の著書を中心に勉強するのが普通のやり方ですがその人の結論へ所論を導かうとして先づレディ・メイドの目標を設定してかかるゝと往々無理が出来たり論理の飛躍を敢てしたりすることになつて却つて委員の心證を傷ふことになるのではないかと考へます。試験委員の如何やその學說の傾向等はそれほど問題とは思はれませぬ。要するにうすつべらなバラツクの速成に焦心することなく、おちついてジツクリと鉄筋の土臺を築いて行けば建造半ばであつても立派に合格することが出来ると思ひます。

(四) 尚本會員の中では既に優秀な成績で關門を突破された玉置實(三回)、長尾頼隆(六回) 西學兄の如き方々もありますし現在孜孜として準備に精進されてゐる方もあります。歴史の新しい舞臺は展開されました。私は本會員諸兄が私共の周圍に巢喰ふ無理解にこだはることなく、或は無智に根ざし卑屈に養はれたコンヴェンションナルな考へに捉はれずにハツキリした歴史觀と職分觀に立脚してどしどし官界に進出されんことを切望して止みませぬ。

## 高松時代の思い出

少し暇ができた筆頭副幹事長時代のエッセイであり、旧制高松高商の学園生活と教授陣の思い出を楽しく回想している。『硯滴』にも掲載された。

これでも私は高商在学時代、胸を病んだことがあります。高商二年の夏休みに私は軽い湿性肋膜炎というものに冒され、そのまま通学ができないこともなかったが、医者のお勧めもあり、思い切って休学することにいたしました。そのため五回の卒業生と同時に入学して、六回卒業ということになったのです。だから他の同窓諸君より一年余計に母校に厄介になっておるので、いわば多額納税者の資格をもっておるし、そのお陰で二倍の友人に恵まれておるわけです。今になって考えてみるとむしろ有難いことであつたと思います。

私が入学した昭和三年といえば、ちょうどはなやかであつた大正デモクラシイの風潮が漸く色褪せてきたし、昭和二年の金融恐慌の余波も手伝つて、明るい展望が見えない何かしら重つたるい感じのする時代であつたように思われます。それでも校内にはまだロマンチックな雰囲気が潤っていたわけではなく、南国の明るい甘美な自然と相俟つて、自由に潤達な学園生活を楽しむことができました。



大泉行雄教授が、新進の商業学者として人気を蒐め、先生の恩師である奇才故大西猪之教授の衣鉢を汲んで、終始和服で出講され、黒板には右肩のあがった字を横に書かれておりました。それがたまらない魅力でありました。根岸、鎌田両教授の簿記は、私にとつてまことに砂をかむようなさく莫たるもので、到々簿記は入口で遠慮してしまう結果になりました。堀江邑一教授の経済原論は、ナロード二キの翻譯のようなもので、先生はその当時から既にはつきりマルキシズムをみずからの学問と行動の指針とされておつたようです。老来、先生は大変やさしくなられたようですが、今なお日ソ友好協会の片隅で、協会の仕事に精進されておるようです。いずれにしても一筋の眞実を以て終始一貫その道を歩まれておる姿は立派だと思えます。昭和六年満州事変に出張した軍人に慰問袋を贈るべく奔走していた私が、或日、こつびどく先生に叱られたことを思い出します。上阪教授の英文学、矢田教授の独文学は、夫々に味のある待たれる講義でした。椎名教授の商品学、寺田老教授の地理学は、何れも地味ではあつたが、その人格からにじみ出る眞実さと犯し難い気品にうたれたものです。

中村賢二郎教授の商業英語ですが、イントロの名に恥じず、先生は講義を他処にその時折の人生の哀歎を醇々と説かれるのが常でした。だから、英語そのものよりは、その余技の方がむしろ人気を呼んでおりました。英語といえは当時外人教師として英人ハワード、米人ミニスの二講師がおられ、われわれ学生との間に日常の接触が随分ありました。お蔭で私はハワード先生に函館の高利貸から受けておる借金の支払遅延の弁解状を何度か書かされる始末でした。外人講師といえは独乙語にベルさんという六尺豊かな長身の先生がおられました。この人は何でもロシア人で、気の小さい寡黙な方でした。ある時、何かのはずみで先生の講義をみんなでポイコットしたのですが、その時の悲しそうな顔が今に忘れられません。

法律は清水谷、藤本両教授に教わりましたが、法律のように歴史のある広汎な学問の領域は、ちょっとのぞいた程度で判る筈はなく、われわれにとって法律は終始重い荷物になっておったことは争えませんが。

体操ではオンピキのあだ名で有名な三木先生がおられたが、この人は、随分と世話ずきの人で、今日でいえば学生課長というような役割を併せもたれておって、何くれとなく学生の身上相談にのっていただきました。軍事教練の配属将校は西村中佐でしたが、私の友人河野吉兵衛君が、あとで西村先生の御令嬢と結婚されたところをみると、河野君は当時すでに西村中佐に相当気に入られておったのではないかと思われま。

沢田校長は、文部省の秘書課長から赴任された文字通り優れた学校行政官で、その端正な風貌、その几帳面な行蔵の故を以て、学園の内外に揺るぎないプレスチージを打ち建てられておりました。

当時の校友会雑誌に学生の論文がよく掲載されましたが、現在東京銀行の常務をしておる橋本清君が、一年の時に既に古典学派の学説史めいた長文の論文を投稿していたのには全く驚きました。尤も橋本君は稀にみる秀才で、私は今でも彼は日本における屈指の国際経済学者であると思っております。今は亡き植村福七君も、よく出来た秀才であったが、どちらかといえば彼は橋本君のようにアカデミックではなかったと思います。ところがその植村君が学校に残り、橋本君が銀行で銭勘定をするという廻り合せになったのは、何としても運命の皮肉であるように思われます。今春、不幸にして急逝した神原龜太郎君も同期でありました。彼は陸上競技部で一生懸命走ったり跳んだりしていたが、どこからみても秀才のようには見えませんでした。ところが生前彼は、われわれのクラスで自分が二番の成績であったと言ひ張るのを常としておりました。その根拠を聞いてみると、植村君が卒業式で総代

として答辞を読んだのだから首席であることはハッキリしてゐる。その次は俺だということです。尤も昭和二十年七月の空襲で母校が焼けてしまったので、その当時の記録が烏有に帰したため神原君の主張の正否をたしかめる道が永久に閉ざされてしまったわけです。神原君は泉下にあつても依然自分は一番で出た秀才としての誇りを今尚もち続けておるのではないかと思ひます。成績などというものは、なるべく公表しない方がよいように思われますし、できたら、いち早く焼き捨てておくに限ると大学当局に勧告したいと思ひます。

高松高商、そしてその後身香川大学経済学部は、決して天下の名門ではありません。名門必ずしもよき師とよき友に回り合うものではありません。私は高商でよき師とよき友に恵まれたことを感謝しております。それは私にとつてはかけがえのない珠玉のように貴いものであります。「人生は友情を求めて辿る旅である」と誰かが申しましたが、正に友情こそが、われわれにとつての唯一無二の財産であると思ひます。水にも溶けず、火にも焼けず、革命によつても奪われることのない大切な宝であります。得意の朝にも、失意の夕べにもわれわれの伴侶となつてくれる貴いものであります。校庭のアカシヤの並樹の縁が、いよいよ濃くなるように、高商を媒体として恵まれた師の恩と友の情が、年輪を経るに従つて益々濃くなることを希求して己みません。

## 橋畔随想 大学教育と考える力

自民党筆頭副幹事長時代に、母校・一橋大学の在学当時の学風を回想したもので、大学教育とは考える力を養うところであると強調している。

His was a workshop in which he devoted his life to the training and equipment of the men who won for Japan autonomy and distinction of her commerce with the world.

このセンテンスは、母校の図書館の内にあるフロックフォイス先生の胸像の台に刻まれたもので、故上田辰之助博士がものされたと聞いておる。明治から大正にかけての母校のユニークな役割、FOBからCIFへという日本貿易の前進に演じたわれわれ一橋の先輩の貢献というものを、結晶させている名文である。

ところで、私が在学したのは昭和八年から十一年にかけての期間であつたが、その頃の橋畔の雰囲気というものは、日本貿易チャンピオンの養成というよつな実務的な技術的なものとは程遠かつた。商業英語力の訓練、世界人のマーケティングの研究、経営財務の分析と整理、企業の組織と管理等の諸問題を取り扱う講座は、どこか片隅に追いやられていて、誰もそれを不思議に思っていないよつで

あった。学園全体がいれば大いに背伸びして、大学らしい大学の実体を身につけようと苦吟してあるような時期であった。大学というところは本来考える力をどう錬成するか、方法論をどう打ち立てるかにその使命があるのであって、既成の経済学や法律学の解明や解釈をさえ超えて、遠く深く文化哲学の領域の中に踏み込んで行くこともがいていようであった。

もちろん、こういう行き方に対する抵抗や批判がないではなかった。杉村広蔵先生の学位論文に対する白票事件というものも、こういう行き方に対する一つの批判ととれる一面をもっていたといえよう。しかし、当時、助教教授や助手であられた杉村、中山、山田、高島、増田、高橋、板垣等の諸先生の学風には、実務的な技術の習得という色彩よりも、いわゆる方法論の模索という学問的な苦吟が、われわれ学生にも感じられた。

私などは、しかしながら、実務的技術を身につけることもなく、とって方法論の模索を通して、思考力をそれなりに身につけることもなく、中途半端で社会に出てしまった。ところが、その後おりにふれ、恩師の本を読み直してみると、学生時代とは違った味覚を感じるようになったり、実務の世界で自分自身の意見をかためなければならぬ破目になって、自分自身の思考力というか、構想力というものの不足を、しみじみかみしめなければならぬ場合が多くなってきた。英語が身につけていないとか簿記会計に自信がない以上に、根本的にみずからの考える力の不足ということを痛切に考えるようになった。

その人の力量というものは、体力的にはもとより頭腦的にも、その人が二十代において達した水準が決定的であるといわれる。体力の水位については、過般のオリンピックでいやという程実証されたが、囲碁の世界などでは頭腦の水位が二十代で決まるものが既に明らかにされておる。私は、在学当

時の橋畔を回顧して、その当時もっともこの領域で自分の頭脳を練っておけばよかったのにと後悔している。語学とか会計というようにわれわれが技術的なものときめてかかっている分野においても、本当はこの考える力を持たないではそれらを身につけることはできないもののようにある。

私の在学当時の一橋の学風は、決して間違っていたのではなかった。間違っていたのは私達が中途半端であったことではなかったかと思う。